

ラジオ放送  
＜令和2年7月～9月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.432



## もくじ ~ contents

### <こころの散歩道>

☞ 軽い音楽に乗せたちょっといい話

- 助けられたり助けたり *page 1*
- あの時のゆかいなおじさんへ *page 5*
- 捉え方の達人 *page 9*

### <教師インタビュー>

☞ 金光教の先生へのインタビュー番組

- 緩和ケアの現場から  
長崎県・諫早教会 原信太郎 *page 13*

### <平和>

☞ 戦争体験者のお話

- 八幡の大空襲  
福岡県・南八幡教会 瀧内幸子 *page 19*

### <先生 & 信者さんのおはなし>

- 幸せの匂いがする (信心ライブ) *page 24*
- 私の中に詰まっているもの (信心ライブ) *page 28*
- 崩れゆく憎しみ (ピックアップ-人間関係-) *page 32*
- あれ、できるようになったよ  
(ピックアップ-人間関係-) *page 36*
- 見えるおかげ、見えないおかげ (信心ライブ) *page 42*
- 闇と光 (信心ライブ) *page 46*
- 私がポジティブになった訳 (信心ライブ) *page 50*
- ごちそうさまをどこで言う? (信心ライブ) *page 54*

## 「助けられたり助けたり」

日本人が訪れる人気の海外旅行先、ハワイ。

約20年前、私たち夫婦も新婚旅行で訪れて、魅力にハマってしまった2人です。ハワイ旅行が仕事の励みにもなっています。

新婚旅行から数年後に、ハワイを訪れた時のことです。現地での移動は、観光客向けのバスではなく、地元の人が利用するバスに乗ることにしました。ガイドブックを買って、路線やバス停の場所、何番のバスに乗れば目的地に行けるかなど、下調べをしていました。

到着して3日目の午後、大型スーパーへ買い物に出掛けました。日本に持って帰るお土産も

買う予定です。

目的のスーパーに到着。チョコレートやクッキーなどの色とりどりのパッケージが目がくらみ、あれもこれもと2人で競争するかのようになり、次々と買い物カートに入れていきます。冷静になったのはレジで支払いを済ませた時でした。

「こんなに持てる？」

「持って帰らないと……」

「だれ？　こんなに買ったの……」

「自分だろ！」

お互いがお互いのせいにしながら心を静め、それぞれ両手に大きな袋を提げて店を出て、無言でバスを待ちました。

「あっ！　来た！」

先に乗るように促された私は、一段二段とス

テップを上がりながらバスの中を見ました。高校生ぐらいの男の子たちと目が合いました。私たちが尋常でない大きな荷物を持っていることに気付いたその3人組の青年たちは、ハツとした表情で、誰からともなく座っていた席から立ち上がり、私たちに席を譲ってくれました。「えっ!?」と思わず声が出ました。席を譲ることはあっても、譲られたのは初めてのことでした。

夫と顔を見合わせながら席に座りました。とても楽でした。精一杯のありがとうの思いを込め、自分なりのとびきりの笑顔を向けて、「サンキュー」と言いました。青年たちの照れくさそうにはにかんだ笑顔が、今も心に残っています。

\*

車で仕事に出掛けるある朝のことでした。

遠足に向かうのか、信号のない横断歩道で10人ほどの幼稚園児たちが、一列になって手を挙げている姿が目に入りました。対向車と私の車と、ほぼ同時に停止しました。先頭を歩く先生について、子どもたちは元気に渡り始めました。後ろを歩く先生が、何度も何度も対向車と私へ交互にお辞儀をしながら渡っていきました。先生と子どもたちのニコニコした笑顔を見て、うれしい気持ちになりました。

しばらく行くと、左側のコンビニから道に出ようとする車に気付き、気を良くしていた私は、手前で止まって、その車に入ってもらいました。その日の夕方、今度は仕事から帰る途中にこんなことがありました。ガソリンスタンドから道に出る時、いつもなら車が途切れるのをしば

らく待つのに、この時は止まってくれる車があつて、待たずにスツと道に出ることができました。

「朝、譲ったから、今度は譲ってもらえたのかな？」

夜、この日の出来事を夫に話しました。「そんなのたまたまだよ」と、相手にされないかと思いましたが、意外にも「そりゃそうさ！」と、きつぱりと真剣な答えが返ってきました。同じような経験を夫も数多くしているのだと想像しました。夫は続けて言いました。

「してあげたことは自分に返ってくる。でも、こうしてあげたらこうしてもらえるかな、と期待したり、してもらいたいからしてあげる、ということではダメ。良いことも、また悪いこと

も返ってくる。相手のことを思つて真心でしたことは、必ず返ってくる」

力強く語る夫の言葉に、この日のうれしい気持ちさがさらにさらに大きく膨らみました。

\*

平成7年の阪神淡路大震災で、仕事場と住居を兼ねた建物の一部が倒壊しました。全国からたくさんの支援が届きました。物質的に助かったことはもちろんでしたが、次々に届く救援物資に多くの方々の祈りを感じて、心が温かくなり、よりうれしさが増し、心の助かりを得ることができました。

そんな中、父とテレビを見ている時のことです。神戸に来てボランティア活動に励む大学生に、インタビューをしている様子が映りました。

「どんな思いで活動していますか？」と問われ、問われた大学生は「お互い様ですから」と答えました。一緒に見ていた父は、「お互い様」という大学生の彼の思いに心を打たれ、「お互い様とはなあ、うれしいなあ、ありがたいなあ」と言いながら、目を潤ませていました。

働きは、譲ったり譲られたり、してあげたりしてもらったり、日常のささいな助け合いから、喜びと共に大きく大きく広がっていくように思っています。

20年後に行われた復興記念集会のテーマに、「助け合って生きるのが人間」という言葉がありました。父が心を打たれた「お互い様」という言葉を重ねながら、震災の時に、たくさんの方々に支援していただき助けていただいたことの、うれしくありがたかった当時の喜びが思い起こされました。何年経っても忘れることはありません。

人を思う温かい心、人と人とが助け合う尊い

## 「あの時のゆかいなおじさんへ」

87歳になる祖母の家に、片付けのお手伝いに行った時のこと。棚の中から、ごっそりと手紙の束が出てきた。「えー、こんなに手紙とってるん？」と聞くと、祖母は、「いざ捨てよう思うても、読み返したら捨てれんやろう。書いてくれた人のことを思い出すけんねえ」。こう話しながら、懐かしそうに手紙を読み始めてしまった。

「ああ、いかんいかん。読み始めたら一向に片付けは進まんよ」と思ったが、ほほ笑みながら手紙を読む祖母の姿を見ると、「まあ、これも大事な時間なんよね。書いてくれた人との思

い出がいろいろとよみがえるよね。片付けはぼちぼちでいつか」。こう思えてきた。

そういえば、私自身、手紙は久しく書いていない。字を書くのがおっくう、書くのにも届くにも時間が掛かるなどなど、最近ではスマホやパソコンのメールでちよちよつと送っておしまい、といった感じた。用件だけのやり取りで、後から読み返すこともほとんどない。

手紙を手にとってみると、直筆の文字から伝わる温かさがあり、近況を伝えながら相手への感謝の心や気遣う心を感じる。文字も文章も人それぞれ、個性も感じる。「確かに何度でも読み返したくなるものだな」と手紙の世界に引き込まれていったのだった。

\*



片付けの最中、「あつたあつた。これ見て見て」と祖母はうれしそうに古い手紙を持ってきた。「奥に直し込んだんやね。これを探しとつたんよ」と、祖母はほこりを払いながら、便箋びんせんと一枚の写真を取り出した。「これ何？」と聞くと、祖母はこの手紙のことを教えてくれた。

話によると、祖母と祖父、夫婦二人で公園を散歩していた時に、遠足に来ていた小学生たちと出会った。写真が好きで、いつもカメラを持ち歩いてきた祖父は、その子たちの写真を撮ってあげたらしいのだ。その時に学校名を聞いていて、後日現像して写真を学校に送ったそうである。これは子どもたちからのお礼の手紙なのだという。そこにはこう書かれていた。

「文章も字も下手ですが、あの時の僕らみんなまで真心込めて書きました。写真ありがとうございます。わざわざ学校に送ってくれて、先生は、『世の中には親切な人がいますね』と話していました。みんな、『またおじさんに会えるといいなあ。あの日のように、穏やかな気持ちでおじさんと遊びたいなあ』と話しています。おじさんの手紙に、『みんな元気に楽しく学校で過ごせるように神様にお祈りしています』と書かれていてびっくりしました。うれしかったです。おじさん、くれぐれもお体に気を付けて。おばさんにもよろしくお伝えください。では、さようなら。あの時のゆかいなおじさんへ。あの時の僕らから。昭和二十七年二月二十五日」

そして一緒にあつた白黒の古い写真には、満

面の笑みを浮かべる坊主頭の少年たちと先生らしき女性が写っていた。祖父はこの手紙を大切に取っていて、祖父が亡くなった後は祖母が受け継いで、奥にしまい込んでいたらしい。

「へー、『ゆかいなおじさんへ』だって。じ

いちゃんってひょうきん者だったのかな？」

祖父は若くして亡くなったので、私には祖父の記憶はないが、愉快に子どもたちを笑わせながら写真を撮る祖父の姿を想像した。手紙が若き頃の祖父の姿をイメージさせてくれる。何ともありがたいことだ。これから先も、この手紙を家族みんなですつと大事に残していこうねと話し合った。

70年ほど前の1通の手紙が、時を経て、世代を超えて受け継がれていくなんて、手紙を書い

てくれた「あの時の僕ら」は思いもしなかったことだろう。もうおじいちゃんとなったであろう「あの時の僕ら」は今、元気にされているだろうかと思いを巡らせたのだった。

\*

こういうことがあって、私は、久々に手紙でも書いてみるかとペンを執った。宛先は学生時代の先生。先生には家で食事をごちそうになったり、学ぶことや生きることについて、いろいろと教えてもらったりと、大変お世話になった。卒業して離れてから、早20年。遅くなったけれど、あの時を思い出しながら、お礼と近況を手紙にしたため、ドキドキしながら送ったのだった。

数日後、うれしいことに返事が届いた。そこ

には、「元氣そうで何より。まだまだ40歳。今のうちにたくさんたくさん失敗して、たくさん恥をかいて、大きな人間に育つことを願っている」と書かれていた。

仕事でキャリアを積み、評価、成功にとらわれていた私にとって、「たくさん失敗し、たくさん恥をかいて、人として大きく成長を」との言葉は心に響いた。忙しい毎日の中で、時折読み返す宝物の手紙となった。私もこの言葉を、いつか後輩や子どもたちに伝えたいと思う。

口では言いにくいことも、手紙なら素直に書けるものだ。あの時のあの人へ向けて、祈りや願いが込められた言葉、真心のこもった言葉が届けられていく。その言葉や手紙が、時を経て受け継がれていくこともあるのだ。そんな温か

い言葉の広がりをお大切にしていきたいと思う。



《こころの散歩道》

「捉え方の達人」

先日、家族でドライブをしていると、「早く行け」と言わんばかりに、後ろにビタツとくっついて走る車がありました。私の速度メーターを見ると法定速度。「何でルールを守っている

ほうが嫌な思いにならなあかんねん」と内心イライラしながら運転していると、追い打ちを掛けるようにその車は、見通しの良い道路に差し掛かった時、私をにらみつけ、クラクションを鳴らしながら猛スピードで抜き去っていきました。「警察に捕まったらいいのに！」。腹が立ってハンドルをたたきました。でもその時、7歳の息子が、「お父さん、もしかしたら、あの

車は、もうすぐ赤ちゃんが生まれるかもしれないから急いでるのかもよ？」と言ったのです。

私はその言葉を聞いて、「そんな捉え方があるのか」とハツとさせられました。どんなことがあってもあおり運転はいけません、息子の言葉のおかげで私のイライラは取り払われたのです。

\*

生きているといろんなことに出合います。楽しくうれしいこともありますが、時にはつらいこと苦しいことも起きてきます。同じことが目の前で起こっても感じ方は様々で、どこまでも悪く捉える人もいますが、反対に、どこまでも良く捉えることができる「達人」っていますよね。

\*

私の家の近所に、60代の勝さんまかつという方がいます。勝さんはいつも明るく、話をすると、こちらが元気をもらえます。

ある日、その勝さんと道でばったり出会いました。勝さんは私に、「ちよつと聞いて」と興奮しながら話し掛けてきました。

「さつき警察から電話があつてな、『お宅に聡さんみづという息子さんおられますか？』って聞くんや。『はい。います』って答えたら、神妙な声で『実は、その息子さんが…』って言うねん」

私もその息子さんとは友達だったので、ドキドキしながら、「息子さん、何かあったんですか？」と尋ねると、勝さんは、「そうやろ。何

かあったと思うやろ。それで心配して聞いたら、警察が、『財布を落とされたみたいで、今、警察署で預かっているから、取りに来るように言っておいてください』だって。ビックリさせるよな。『お宅の息子さんが財布を落とされて』って先に言えばいいのに。何かあったんちゃうかってドキドキしたわ」。こんなふうに怒り気味に話すのです。

しかし、続けて、「でもな、警察の話し方のせいで、もしかして事故したんちゃうかって思って本当に焦ったんやけど、そのおかげで、息子が事故に遭った時の悲惨な感情になれたんだよ。それで息子が元気でいてくれるのって当たり前じゃないんやな、ありがたいんやなっていうことに気付けてん」

勝さんは、幸せそうにそう話してくれました。

\*

よし子さんという私の尊敬する方がいます。

お年は95歳で、どんなことがあっても、「ありがたい、ありがたい」と言っていていつもニコニコされています。ある時、ご先祖様の供養をしている最中、子どもが廊下を走り回って遊んでいました。親は、「静かにしなさい」と怒るのですが、よしさんは、「子どもの足音は何よりのご先祖様へのお供えですね。子どものトントントンという足音は大人では出せませんからね」。こう言ったのです。この時、子どもはもちろん、親の心も救われました。

そのよしさんが93歳の時、だいたいこつ大腿骨を骨折し、手術をしました。手術前はお医者さんから車い

す生活になるかもしれないと言われていました。手術後、いつも笑顔のよしさんが人前で顔をゆがめるくらい大変なりハビリを一生懸命頑張つて、今では杖をつけて歩けるまでになりました。そんな大変な思いをしたよしさんなのです。手術が終わってすぐのことでした。よしさんは、自分の足をさすりながら、私に、「93年間も使ってきた足なんだから、よくお礼しなさいよつて、神様が私に言ってくれてると思うんですよ。リハビリは痛いしつらいこともあるけれど、少しはこの痛みがないと、体に感謝することを忘れてしまいますもんね。だから、痛みがあるごとに、『今日までありがとう。でも、もう少しよろしくね』と足をポンポンとたたいて感謝をしているんです」。こう話してく

れました。

そして今では、「よし子さん、足はどうですか？」と尋ねると、「ちよつと痛いけど、右足を出して左足を交互に出せば、なぜか歩けますねん」と笑いながら話しておられます。そして、よし子さんの後ろを歩くと、「ありがとうございますございます。ありがとうございます」と一歩一歩感謝の声が聞こえてきます。

\*

生きていると、自分の思いどおりになることもあれば、思いどおりにならないこともたくさんあります。そんな時、不足に思ったり落ち込んでしまいがちなのですが、勝さんやよし子さんを見ていると、思いどおりにならない中にも、ありがたいことは隠されているのだと思わせら

れます。物事の捉え方って大切ですね。

今日、今から起きてくること、皆さんはどんなふうに捉えますか？

《教師インタビュー》

「緩和ケアの現場から」

(ナレーション)

皆さんは「緩和ケア」という言葉をご存じですか？ 末期がンを始め、治療することが難しい病気の患者さんに寄り添い、体の痛みやつらさ、精神的な不安を和らげるといった体と心のケアをすることです。

今日は、その緩和ケアの現場で活躍している、長崎県・諫早教会いさはやの原信太郎はらしんたろうさんをご紹介します。

原さんは金光教師である傍ら、呼吸器内科医、緩和ケア医、臨床宗教師として、長崎県内の病院に勤めています。

これまでたくさんのお患者さんに接してきた原さんですが、中でも特に印象的だった2人の患者さんについてお話しくださいました。

一人は、時間を掛けて、お互いの関係性を築けていた患者さんです。ある日、「何か言っておきたいことはありませんか？」と何気なく口にしたひと言がきっかけでした。

(原)

「何か言っておきたいことはありませんか」というその私のひと言に目をつぶって、ちよつと眉をしかめただけで特に何も声を発さなかったんですね。その患者さんの隣に娘さんがいらっしゃいました。それでこの会話を聞いていて、私が部屋を出ますと、そのご家族からすごい剣



幕で怒られました。「どういいうつもりですか。患者はね、もう自分がこの後どうなるかなんて分かってるんですよ。それなのに、『死にますから最後にひと言残しませんか』と言ってるに等しいでしょ」って。

その時、本当にしみじみと失敗したと思ったんです。私とその患者さんとの間には、ある程度関係ができてるかなと思っていただけでも、ご家族とは全然話をしてなかったんですね。

とにかくお話を聞かせてもらおうしかないと思って、ずっと聞かせてもらいました。そうして聞かせてもらおううちに、ご家族も一緒に戦ってるんだなということに気付かせてもらったんですね。私には患者さん本人の悲しみしか見えなかった。看病をしているご家族も同じように

苦しんでいて、同じように悲しみを抱えてるんだ。そういうことに気付かせてもらったんです。

(ナレーション)

そして、もう1人の患者さんは、首から下にまひが残り、ほとんど寝たきりだった方です。

(原)

病気のつらさも相まって、すごく気持ちが悪くて、とにかく人に当たりまくってる方がいらっしやっただけです。私は何回か面接させてもらうと、確かに心は荒んでると言います。私か、もうピリピリピリピしてたんですね。私は、「どうぞ金光様、この方の心が助かります

ように」と本当にもうずっとお願いしながら話を聞かせてもらいよったんです。

ある時その方が、「私のまひは、どこか良い病院で治療してもらったら治るんじゃないですかね」と突然言い出したんです。自分の病気はもう治らないからここに来ているんだと本人は知ってるはずなんです。知っているのに、「治るんじゃないか」と言うことは、何とかやってほしいのに、何ともならない苦しみですよね。「ああ、ここに苦しみがあるんだろうな。何と答えようかな」と思って、祈りながら聞いてる時に、ふっとね、末期の子宮頸がんで、もう余命1カ月だと宣告された主婦のお話を、何となく思い出したんです。それはその主婦が、「人間が生まれる確率というのは、もう宝くじ

の大当たりが何万回も連続で当たるような奇跡に近いんだ」ということを知って、「ああ、まさに自分の命というのは、本当に奇跡の中で生まれてきたんだな。ということは、この命は本当に生かされて、今自分が生きているんだ」ということを病室で気付かせてもらったんですね。「本当にありがとうございます」としみじみ思って、そこからその主婦はあらゆる物事に「ありがとう」ということを始めたんです。もう自分の抗がん剤治療で抜けていく髪の毛の本一本にすらも、「ありがとう。ありがとう」と言うようになったんです。すると、そのありがたうを繰り返してるうちに、信じられないよくな、本当に奇跡的なことが起こりました。抗がん剤がすごく効いて、放射線治療もよく効い

てきて、もう余命1カ月と言われていたのが、完全にがんが治ってしまふんですね。そういう奇跡的な体験をした。

そのエピソードをその方にお話しさせてもらったんです。そうすると、あれだけピリピリピリピリされてた方が、「ああ、『ありがとう』ですか。なるほど、それだったら私もできるかもしれない」とぼつっと言ったんです。それから本当に「ありがとう」を言うようになってきたんです。そうすると、次第にその病棟のスタッフから、「あの方の表情が最近明るくなりましたね」とか、「『ありがとう』と言うようになってきたんですよ」とか、そういう声が聞こえるようになってきたんです。

それだけでも結構すごいことだと思いますけ

れども、それどころじゃなくて、さらにまだんだん奇跡が起こってくるんです。首から下が完全にまひしていたのが、少しずつ少しずつ自分の手でティッシュをつかむことができるようになったりとか、スプーンを手につかんで、食べ物を自分の口に持つていくことができるようになってきたんですね。しまいには、完全に寝たきりだったのが車椅子に座れるぐらいまでになったんです。そのぐらい劇的な変化が本人に起こってきたんです。「すごい力だな」と本当にしみじみ思いました。

「ありがとう」を実践される中で、実際に体の機能が回復しましたからね。体の機能が回復するだけじゃなくて、医療者との関係性だったり、ご家族との関係性まで回復していくんです。

この「ありがとう」という言葉、金光教では「あらゆる物事に感謝しなさい。自分の身の回りのこと全てに感謝しなさい」と言います。まさにそれを実践することによって、こんなに人は変われるんだというのを、本当にまざまざと見せていただいたなと思うんですね。

(ナレーション)

2人の患者さんから大切なことを教えてもらったという原さん。

原さんは、「患者さんの助かりと自分の成長、その両方を、神様が願ってくださっている。全ての患者さんは、神様が出会わせてくださっているのだ」と実感しています。

今日も神様にお願いしながら、患者さんと、

そのご家族に寄り添う原さんの姿に、人との出会いをもっと大切にしていきたいと感じずにはいられません。



《平和》

「八幡の上空襲」

(ナレーション)

瀧内幸子たけうちゆきこさん、現在84歳。瀧内さんは、福岡県北九州市八幡やはた、かつて八幡製鉄所と共に栄えたこの街で生まれ育ちました。幼い頃、日本は戦争の真ただ中でした。昭和20年8月8日、瀧内さんが10歳の時、八幡の街はアメリカ軍による激しい空襲を受けました。

(瀧内)

朝10時頃でしたか、私は外に遊びに出てたんですよ。そうしたら、ウーとサイレンが鳴って、「あっ、空襲警報！」と思ったんです。「早く

家に帰らないと」と思って、走って家に帰っていたら、目の前にパーッと焼夷弾しょういだんが落ちたんですよ。あれはたぶん焼夷弾だと思います。銀色で、こんな形でした。目の前にそれがすっと落ちて、もう急いで帰って角を曲がったら、母が玄関の前で、「ゆっこちゃん、早くおいでおいで！」と待っていました。それで急いで走っていきました。私、7人兄弟なんですよ。妹たちと手をつないで、「早く早く」と言いながら、もう急いで母についていきました。

私の家のすぐそこに、目の前に結構高い丘があって、そこに石段があるんですよ。それでその石段をダーツと上がって行ったらお寺があって、そのお寺の裏側に、町内の人が作った防空壕があつたんです。慌ててその防空壕に母と弟

や妹たちと一緒に入ったんですよ。防空壕の中に入っていたら、もうずーっと時間とか分からないですよ。そうしたら誰かが、「あっ！お寺に火が付いたよ！」と言ったんです。すると、町内会長の奥さんが、「皆さん、覚悟してください」と言いました。お寺に火が付いたら、お寺の裏側だから、防空壕にもすぐ火が入ってくるでしょ。だから、「皆さん、覚悟してください」と町内会長の奥さんが仰ったんですよ。そうしたら、みんな「南無妙法蓮華経」とか「南無阿弥陀仏」とか、いろいろその辺りで唱え出しました。持ってた荷物を放つたらかしてね、もうこのまま死ぬんだという雰囲気ですね。

そして、それからどのくらい経ったか…そん

なに経ってないと思うんですけどね、何かドンドンドンドンって板戸をたたく音がして、消防団のおじさんが、「西弥生町にしやよいまちの者はここに入ってるか」って言われたんですよ。それでみんな「はい！」と返事しましたが、「へえ、助かったー」と思いました。

そうしたら、私の横にいた人が、戸を開けた時に、「水が飲みたい」と言ったもんだから、そのおじさんが鉄かぶとを…あの頃みんな鉄かぶととかかぶってますからね。それですぐそこに防火用水というのがあったんですよ、こんなに大きいのです。町のあちこちにあって、それに水がいっぱい張ってあるんです。そこからくんでくださったんですよ。それを順番に飲んだのですけど、水が熱いんですよ。防火用水に水が

入れてあるけど、その熱気で水がもう沸かしたみたいになってるんですよ。だから、「熱い！」というほどではなかったけど、でも口に付けたら…もうその感覚も覚えてますね、鉄かぶとの感覚。それに口を当てて飲んだら、熱いんですよ。それを一人ずつ順番に回して飲みましたね。もう何時間もずっとそこに入ってるから、みんなのどが渴いてたんですね。

みんな捨てていた荷物を抱えて、慌てて入口から出たんですよ。今まで真っ暗な中にずっと何時間も入っていたでしょう。たぶん朝入って夕方の4時ぐらいに出たんだと思います。8時間ぐらい入ってたんですかね。外に出たら、もうまぶしくて…もうパツと外に出た途端に、目がもうこんなになるみたいな感じでした。真っ

暗な中に何時間もおって、パツと目を開けた瞬間に…防空壕があるお寺は山の上にあるんですが、パツと目を開けたら、もう見渡す限り焼け野原で、1軒も家なんか見えないんですよ。あっち向いてもこっち向いても、ズーッと焼け野原で。炎がこのくらい上がってる所もあるんですよ。そして、ふと見たら、馬がそこにコテンと焼け死んでました。すぐ横に馬が転がってました。もうぼうぜんとしてしまいました。どっこも焼けてしまつて、1軒も家が見えない。見たらないんですよ。

(ナレーション)

この日、無数のアメリカ軍爆撃機B 29が、大量の焼夷弾を市街地へ投下しました。この空襲



は、約1万4千戸を焼き、およそ2千5百人も  
の死傷者を出しました。瀧内さんは、今もこの  
時の体験が忘れられません。

とか思う人いないでしょうね。もうこれが普通。  
自然の毎日だから。

(瀧内)

だからもう絶対何年経っても忘れないですよ  
ね。自分が経験したことだから：あの時はこう  
だった、ああだったっていうのは：あんなこと  
はもう二度とあってほしくありません。本当  
に思いますね、つくづく。

私にしてみたら、何事もなく朝目が覚めてね、  
主人も元気で目が覚めて、「ああ、良かった」  
と思います。「金光様ありがとうございます。  
今日もいのちを頂きまして、お礼申し上げます」  
と、本当に心から言えますね。ありがたいなと  
思いますね。

(ナレーション)

今、何事もなく、こんなに幸せに暮らさせて  
もらっているのは、本当ありがたいなとつくづく  
思いますね。

だから、今みたいだね、何にもないことが当  
たり前になっていると、当たり前がありがたい

瀧内さんは、何をするにもまず神様にお礼を  
言います。それは、「今、目の前にある当たり  
前の日常は、決して当たり前のものでない」と、  
そのことを繰り返し思い続けて、自分の体験を  
背負い、今日まで歩いてこられた姿なのと思

います。

たった75年前、多くのいのちが奪われた戦争が終わりました。私たちは灌内さんのように、今ある自分のいのちを当たり前だと思ってはならないのだと思います。



《信心ライブ》

「幸せの匂いがする」

おはようございます。今日は兵庫県・金光教香櫨園教会こうろえんの教師、武部眞子たけべしんこさんが、平成29年、岡山県にある金光教本部でお話しされたものをお聞きいただきます。

武部いさおさんのご主人、前の香櫨園教会長・武部勇雄先生は、平成9年に脳内出血が起こり、左半身にまひが残りしました。必死にリハビリをされていたのですが、その4年後、再び脳内出血が起こりました。医師からは、「前は左半身にまひが残りしましたが、今回は右半身にもまひが残り、もう話すことはできません」と告げられたのです。

私は現実が受け入れられないまま集中治療室に入りましたら、勇雄先生は私の顔を見て、「やあ」という顔をしてニコツと笑いました。でも、しゃべれません。あれほどリハビリを頑張つて、あれほど動くようになっていた左手も左足も全く動かない。右手、右足も全く動かない。つまり、両手両足、言語、全身まひという障害を持つて、その日から生きるということになったのです。それでも病院で安心して養生ができ、すっかりリハビリしていただき、ほとんど寝たきりに近い状態から、車いすで移動ができるまでに回復させていただきました。

勇雄先生が倒れて以後、「大変や大変や」と思っている中で、3年後にご本部へお参りさせていただきました。娘が「車だったらドアツ

「ドアよ」と言ってくれたのでした。でも、最高レベルに近い障害者が長時間移動するということは、簡単なことではありません。まず、飲まず食わずで一日中というのは無理です。勇雄先生の食事の分は、全て粉碎し、それに山芋や生卵でとろみをつけます。それを障害者用の器に入れ、障害者用のスプーンをしびれている右手に持たせてあげ、顔の前に鏡を置くと、食べ物ものが自分の口の中のどこにあるか確認しながら咀嚼そしゃくをし、誤飲しないように神様にお願ひしながら飲み込みます。ですから、食事に関してだけでもいろいろな荷物が山のようにできるわけです。それら全てを車に積み込んで、西宮市からご本部へ向けて参拝させていただきました。

お広前正面から入らせていただき、そこから

先はリハビリで練習しましたように、夫婦で向き合って、勇雄先生は私の肩に両手を置いて、私は勇雄先生の腰を支えて、勇雄先生は前に私は後ろに、イチニイチ二とご神前のほうに進ませていただきました。金光様がお座りくださっているお結界けっかいの前にいすを置いていただき、座ったとたん、勇雄先生はお広前の端から端まで響き渡るほどの大きな声で、「ウワー」と泣きました。：ありがたい。それはそうでしょう。2度目倒れたあの病院の集中治療室にいた時は、それから3年後にご本部へお参りができるなんて考えられませんでした。それが、私に支えられてとはいえ、今、自分の足でご本部の畳の上を歩かせていただいたのです。こんなにありがたいことがあるかと思うと、もう抑えきれ

ない。「ウワー」っと泣きました。私も泣きました。そうしましたら、金光様が何度も、「ようお参りができました。ようお参りができました」と言ってくださいました。お参りができるということとは、決して当たり前のことではない。本当にありがたいことです。

そして、平成17年、東京まで車で2泊3日の参拝旅行をさせていただきました。この東京まで行くことができたことが、勇雄先生にとって体力的に大きな自信となり、次の年から車で2泊3日の旅行をさせていただくという流れができました。このように障害1級、介護度4の障害者が毎年車で旅行させていただきました。

すると、勇雄先生担当のケアマネージャーさんが、わが家に来られる度に、「ここへ来たら

幸せの匂いがする。心のよりどころを持っておられる方は強いですね」と仰ってくれるようになります。私はその言葉を聞かせてもらう度に、「それほどのおかげを頂いているんや」と自覚させられました。そうして振り返ってみますと、勇雄先生が倒れて以後、「大変や大変や」と思っている中でしたが、気付けば教会後継者ができ、子どもたちはそれぞれ結婚させていただき、孫を3人授かっていました。その中で勇雄先生は、にぎやかに、そして、心穏やかに養生させていただいている。何とありがたいことかと思われました。どのような状況の中でも、神様のおかげは人間の知恵や計算をはるかに超えて、何と大きくて、何とありがたいことかと思わせていただきます。

いかがでしたか？

生きていると、現実から目を背けたくなるよ  
うなつらいこともあります。武部さんのお話  
を聞くと、どんな状況の中にも、神様は幸せの  
道をつけてくださっているんだと心強く感じさ  
せられます。



《信心ライブ》

「私の中に詰まっているもの」

おはようございます。

今日は、広島県・金光教芸備教会げいびの佐藤さとう智恵子ちえこさんが、平成31年3月、金光教本部でお話しされたものをお聞きいただきます。

私は結婚するまでは長崎市内の路面電車も路線バスもたたくさんあって、JRの駅も徒歩で行けるような所に住んでおりましたので、嫁ぎ先に本当にびっくりして、「すごい所に来たなあ」と思ったんですけど、良く言うと、自然豊かな静かな所です。

それまで学校とか公園とかでしか、土を踏む

ことがなかったんです。そういう生活だったんですけれども、あの辺りはほとんどのおうちに庭があって、植木やお花がたくさん生えて、本当に奇麗で、今頃はすごく緑が奇麗です。だんだん緑が出てきました。桜もぼちぼち咲いてきました。田んぼや畑もたくさんあります。山もあります。

結婚して間もなしです。ある時、おうちの人  
が、「畑のねぎを採ってきます」と言って包丁  
を持って出ていきました。あの辺で言う「ねぎ」  
というのは白ねぎではなくて青ねぎです。お店  
で細長い袋に入って、根っこがちよろっと付い  
ている、ああいう姿しか知らなかったの、「包  
丁を持って何をするのかな。根っこを切ってく  
るのかな」くらいに思っていました。ねぎは抜

いて収穫するもの、とずっと思ってたので不思議だったんです。聞いてみると、「必要な分だけ青いところを包丁で切ってくるんだよ。そうすれば、いくらでもまた新しいねぎが下から生えてくるんだよ」と教えられて、びっくりしました。今が旬のおいしいワケギは完全に抜いてしまおうんですけど、ねぎは青いところを切ってくるんです。

他にもいろいろ植えてあります。冬は毎日、大根、白菜、大根、白菜でした。ほうれん草もたくさん頂きました。夏になるとキュウリやトマトやナス、本当に採りたての新鮮な野菜がすぐ食卓に並びます。

ここに来て初めて、採りたてのキュウリのイボイボがあんなに痛いものと知りましたし、お

ナスにもヘタに鋭いトゲが付いてるんです。トマトは、トマトだけじゃなくて木に触っただけでトマトの香りがする。にがうりは沖繩にしか出来ないものだと思っていました。

結婚して数年が経ち、私も包丁を持ってねぎを採りに畑に走るのが普通になっていました。いつものようにねぎのシャンとした葉っぱに包丁を当ててスパッと切りました。

それまで何度もねぎを採りに行っていました。が、その時初めて感じたことがありました。パンパンに丸々と太った…と言ってもねぎですから中は空洞なんですけど、立派なねぎを包丁でこうやってスパッと切ると、ふっと力を抜いて私の手の中に入ってきたんです。

その感触、ねぎの感触。このねぎの中に入っ



ているものは一体何だろうと思ったんです。今までシャンと立っていたこのねぎ。切ると、ふっと力を抜いて、そっと私の手の中に入ってきた、あのねぎの感触が、初めての感触というか、びっくりしたんです。「この空気は一体何だろう。どこから入ってきたのかな」と思ったんです。

大根は、あんな小さな種からかいわれ大根になって、ずっしりと重い大根が出来るまでに、たくさん栄養を溜め込んでいます。ねぎもすっかり太くなって天に向かってまっすぐフサフサに立ってるんです。ねぎがねぎらしくあるためにこの空気があるんです。まさしく天地のお恵みだと思いました。天地のお恵みがパンパンに詰まっていると思ったんです。目には見えな

くても大事なものが確かに存在する。

それならば、私の中には何が詰まっているんだろうと思いました。天地のお恵みには違いないと思うけど、どこを押しても不平不満がピュッと飛び出してこないかなあと、その時に思ったんです。

私を立たせているものは何だろう。私が私らしくあるために、自分の足で立つために、良いものでいっぱいになりたいと思いました。感謝の心とかでいっぱいになりたい、そう思ったのでした。

あれから20年近くが経ちました。あの時から畑に入る時はお土地を拝んで入るようになりました。ねぎを取りに行く度に、「しゃんとせい」という声が聞こえてきそうです。

「まだまだ足りんぞ。変わつたらんじゃないか。ひよろひよろしてるぞ」

「はい頑張ります」

ねぎと語り合ってるおばさんなんです。

太陽の光を受けて、天に向かってシャンと立っているねぎ。小さな種から大地の中で丸々と育つ大根。自然の力というのはすごいものですね。

佐藤さんはその自然の力の中に、ねぎをねぎらしく、大根を大根らしくしていく働きを見つけたのでした。

人間として人間らしく、自分として自分らしく、そんなふうに生きることができたらいいなと思いました。



《ピクアップ》―人間関係―

「崩れゆく憎しみ」

兵庫県・川西教会 かわにし  
平本行雄 ひらもと ゆきお

愛というのは鏡に映すようなもので、自分が笑わなければ、相手も笑わないのです。

人を憎む、相手を憎むということは、結局はその者から自分が憎まれることになるのです。マッチ1本擦るのにも、「ええい、くそ！」と擦った時は、よく軸が折れて、火が自分の服に焼け焦げを作る。結局、憎しみは自らを傷付けることになるのです。

さて、金光教の信心を長年にわたって続けておられる一婦人が、縁あって高校生を筆頭に3人も子どものある方と結婚されました。

主人とはうまくいくのですが、子どもたちはどうしても新しい母親になじみません。その上、新しい母親に憎しみさえ持つて迫ってくるのです。

「僕たちは決してあなたを『お母さん』と呼ばない」と、子どもたちは連署して母親に突き付けました。「僕たちのお母さんは死んでしまった人、ただ一人だけ」と、兄弟3人は、しっかりと誓い合ったのです。

それからは、子どもたちの憎しみの中での生活が始まりました。いかに信仰を持つ者とはいえ、この生活はつらく苦しいものです。朝、顔を合わせても、「おはよう」のあいさつもありません。学校から帰ると、子どもはそれぞれの部屋に引きこもってしまい、夕食も別々に食べるという

状態でした。

婦人は嫁ぐ前、教会の先生から次のような話を聞きました。

「一度に3人もの子どもができるということは大変なことです。自分の力で育てられると思っ  
つてはいけません。全ては神様にお願いで、  
つらく苦しい時、その苦しい顔を決して子ども  
たちに見せてはいけません。苦しいことがあつ  
て当たり前。高校生まで育ててこられた前の母  
親の苦労も知らずに『お母さん』と呼ばれるは  
ずがないのです。もし子どもが最初から『お母  
さん』と呼んでくなくても、それは表面だけです。  
本当の母親になるには、16年間の育てあげる苦  
労が、これから一度に出てくるでしょうが、頑  
張りなさい」

この先生の言葉に覚悟を決めて入り込んだ家  
庭でありましたが、何度帰ろうかと思つたか分  
かりません。その度に教会に走り、神様に自分  
の至らなさをわび、先生から話を聞いては気を  
取り直し、重い足を家に向けるのでした。3年、  
5年、針のむしろに座るような生活が続きまし  
たが、子どもたちの態度は一向に変わりません。  
婦人はそれでも、子どもたちに真心で世話を続  
けました。どんなに罵声を浴びせられ、時には  
足で蹴られるような時にも、笑顔だけは忘れま  
せんでした。

悲しい心を隠して作る笑顔がどんなにつらか  
つたことでしょうか。家庭の事情を知っている  
者にとって、何とわがまま息子なのかと腹立た  
しく思えることもしばしばでした。

なぜ、あんなに優しい人が好んで苦勞をしなければならぬのかと、神様を恨む気持ちにさえなりました。婦人は、教会に参り、先生から話を聞くことを唯一の心の糧として、せめて長男が結婚するまではと頑張りました。やがて長男は好きな女性ができ、結婚することになりました。「やつと責任を果たした。これで私の役目も終わった。すっかり片付けたらば、この家を出よう。私がいるために子どもにつらい思いをさせた」。婦人は新たに決意を固めて結婚式に臨みました。

三三九度の杯も終わり、宴うたげに移ろうと列席者が席に着いた時、長男である新郎が突然に口を開きました。「皆さん、今日は私のためにお集まりいただき、ありがとうございます。皆

様もご承知のように、私の母は二度目の母であります。私たち兄弟は、この人を母と呼びません。誓いを立ててまいりました。最初は憎しみさえ感じてつらく当たつてきました。ところが母は、私たちがどんなにつらく当たつた時も、にこにこ笑っているのです。まあ最初だけさと思つていたその笑顔は、今日まで一度も変わることはなかったのです。その笑顔を見る度に私の心は複雑な気持ちになつてきました。最近では自身に腹さえ立つのです。これでもか、これでもかと思ふ気持ちが、母の笑顔で、もろくも崩れてゆくのです。私は今とても苦しいのです。そこで誓い合つた弟たちには悪いのですが、今日この機会に、私は改めてこの人をお母さんと呼びたいのです。お母さん、長い間本当にすみ

ませんでした。お許しください」と、涙を流して訴えました。すると、それを聞いていた弟たちが走り出て、「兄さん、よく言ってくれた。実は僕たちもつらかった。兄さんとの誓いをつ破ろうかとばかり考えて、毎日が苦しかった。よく言ってくれださった」と兄弟が互いに手を取り、母のそばで泣き崩れたのです。

結婚式に出席した者も、以前の状態を知っている者が多いだけに、共に涙し、この光景に心から拍手を送りました。

人を憎み、人を呪い、物をぶち壊す、いわば憎しみの感情は、どんな人でも簡単に持つことができます。しかし、人を憎んでいる時と、人を愛している時とは、どちらに心の安らぎがあるでしょうか。

神を信ずることは、愛情豊かな人間になれるということでもあります。愛情の欠けていく社会に、私たちはもつともつと愛情を注いでいきたいと願い続け、日夜取り組んでいます。

《ピクアップ》―人間関係―

「あれ、できるようになったよ」

兵庫県・阪急塚口教会 古瀬真一

「お父さんなんか、大嫌い！」

そう言い残して、小学3年生になったばかりの上の娘は、部屋を飛び出していきました。妹に意地悪を言ったことがきっかけで、姉妹ゲンカに発展。見かねた私が妻より先に、口を出してしまった時のことでした。ケンカしたことをとがめていたはずが、つい勉強のことにまで話が及んでしまったのです。「しまった。余計なことを言ってしまった…」と思っても後の祭り。私の仕事場はわが家にあるので、子どもの一挙手一投足が目についてしまいます。

「ケンカをするのも成長のひとつだ」と、頭では分かっているつもりでも、姉妹で怒鳴り合ったり、手を出したりするのを目の当たりにすると不安にかられ、恥ずかしながら、思わずこちらまで大きな声を出してしまうのです。「こんなにケンカばかりしていて大丈夫だろうか」「勉強しているけど、妹がお姉ちゃんに絡むから、お姉ちゃんは勉強に集中できないな」「成績優秀でなくてもいいが、人並みの成績でない」と、これから困るだろうな」というように、一つの事をきっかけに、次々と気になることが膨らんでしまいます。

そんなことが続いていたある晩、パジャマに着替えた上の娘が、何とも言えない悲しげな表

情で、「学校でイジメられてるねん。明日、行きたくない」と、私に話し掛けてきました。聞けば、娘の顔のそばかすのようなアザを見た同級生から、「それは何？ キモイ！」って言われたとのこと。娘は、大変なショックを受けたがらも、「そんなことは言わんといてほしい」と、何とか自分の思いを伝えることができたということでした。学校では借りてきた猫のよう

におとなしくしている娘が、自分の気持ちをハッキリと伝えることができたこと、また、一人対多数ではなく、特定の友達との出来事だったことが分かり、私は少しホッとしました。と同時に、「もしかすると、妹との度々のケンカは、学校でのモヤモヤを妹にぶつけて発散させているのかもしれない」という思いが湧いてきまし

た。私は、学校での出来事も、妹をはけ口にするような家での振る舞いも、どちらもとても気になりましたが、適切な対応が思い浮かびません。思い付くままに口にした、「顔のことは、お前のチャームポイントなんだから、気にしなくていいんだよ」という言葉も、娘の心には響きません。そうなると、私まで、娘に意地悪を言った同級生を恨めしく思う気持ちが起こってきて、いよいよ言葉に詰まってしまいました。「無理に励ましても、どうにかなるものでもない。それに、娘の同級生を責めるような思いに駆られる自分も情けない」と感じた私は、「一緒に神様にお願いしよう」と声を掛けました。わが家では、毎朝毎晩家族それぞれが、必ず神様に



手を合わせます。その日一日、健康で人や物事に恵まれ、都合良くいくようお願いし、夜休む前には、一日を無事に終えることができたお礼を申し上げるのです。この日の夜は、娘と並んで神様にお祈りしました。

すると、こんな思いが私の心に浮かんできました。「意地悪を言う子も娘と同様。何かつらい思いを抱えているのかもしれない。そして、そのつらい思いを娘にぶつけているのではないか」と。そこで私は、「意地悪する子も、もしかしたら、つらいことや寂しいことがあるのかもしれないよ。だからその子のつらい気持ちがなくなりますようにお願いしよう」と言いました。けれども娘は、「意地悪な子のことなんか、私はお願いできへん」と言って、シヨゲ

ています。「じゃあ、お願いできる私にならせてくださいっていうお願いならできるかな？」と尋ねると、「やってみる」という答えが返ってきました。

翌朝、学校を休みたいと訴えるのではないかと案じていた私は、いつもと変わらない様子で登校する後ろ姿を見送りながら、胸をなでおろしました。

それからも時々、同じ子からアザのことを言われていたようで、「お父さん、まだあの子のことをお願いできへんねん。でも、お願いできるような自分になりたいねん」と、口にしていました。

縁あって席を並べ、ぶつかり合いながら互いに成長していく娘や同級生たち。だから、「親

の私が、娘のことを祈るといふからには、同時に、同級生や先生のこととも合わせて祈っていくことが必要なのである」と私は常々思っていました。ただ、そのことを小学3年生の娘に求めたのは、少し酷だったかもしれないと、いつも心に掛かっていたのでした。そんな私は、「あの子のことをお願いできるようにになりたい」という娘の言葉に、あがきにも似た娘の努力を見せ付けられました。あれからずっと、自分のことだけでなく、人の幸せを祈ること、しかも、自分にとって、都合の悪い相手の幸せを祈るといふ、葛藤に満ちた困難なテーマに、娘は取り組み続けていたのです。そして、その取り組みに応えるかのように、神様の後押しを頂いたのでした。

夏休みが近づく頃、くつろいで新聞を読んでいた私に、娘が声を掛けてきました。何だかとても気分が良さそうです。イキイキと明るい表情をしています。「あれ、できるようになったよ」「あれって何?」「あの子のことをお願いすることやんか。お父さん、忘れたん?」と詰りめ寄られて思い出す私。「そうか! 良かったなあ。よう頑張ったなあ。もう、意地悪は言われへんのんか?」と尋ねたら、「うん、仲いい友達やねんで」と、うれしそうに答えてくれました。そういえば、姉妹で仲良く遊んでいることが多くなってきました。大きな壁を一つ乗り越え、また一歩成長した証でしょう。

親の私も、以前は、わが子を愛し、大切に思うがあまり、目の前の出来事に捕らわれてしま

いやすかったように思います。今にして思えば、顔のアザを巡っての友達との出来事は、親と子が、人として成長していくための一つの課題であったのかもしれない。友達とのこと、勉強のこと、そして、姉妹たちとのこと、お手伝いや部屋の片付けなど生活に関わること……。気になることは次々に起きてきますが、その不安は神様に預け、関わりのある人たちの幸せを祈りながら、親も子も、共に成長していきたいと願っています。



《信心ライブ》

「見えるおかげ、見えないおかげ」

おはようございます。

金光教の教えの中に、「目に見えるおかげより目に見えぬおかげが多い」というものがあります。今日はそれについて、宮崎県・都みやまの城しろ教会の乗原隆治くわはらりゅうじろうさんが、平成30年に、西郷さいごう教会でお話しされたものをお聞きいただきます。乗原さんが学生時代、鳥取県で過ごしていた時の出来事です。

大学2年生の時に、絶対に忘れられない大きな出来事がありました。平成12年7月23日、ちょうど夏の盛りの時でした。

飲食店でアルバイトをしていたんですけれども、「休みの日に申し訳ないが、出前の器を取りにいったらもらえないか」と頼まりました。「ああ、いいですよ」と、それで夕方に鳥取市の隣町に向かって車を走らせておりました。ちょうどその隣町との境目の峠に差し掛かったところで、視界の右のほうから車の影がすっと入ってきました。「えっ？」と思った時には、どんとぶつかっていました。

とっさに目をつぶりましたので、もうぶつかった時の様子というのは頭の中には残ってないんですけど、金属がグシャグシャグシャと一気につぶれていく音、何とも言えない鈍い音なんです。それが頭の中にいまだに残っています。そんな車同士の正面衝突の事故でした。

車が何かドッカンドッカ動いて、ちょっと経って車の動きが止まったんで、「あ、止まったな」と思ってゆっくり目を開けましたら、もう目の前のフロントガラスがバーツと全面にヒビが入っている状態で、「ああ、事故に遭ったんだ」と思いました。

お互いにブレーキを掛けないままでぶつかっただもんですから大変ひどい事故になりました。もうボンネットはぐちゃぐちゃで、右にあるベキハンドルが車の真ん中までずれていたんです。それくらい激しい事故でした。

私は鳥取市内にある赤十字病院というところに搬送されたんですが、これだけの重大事故に遭って、車はもう本当に原形を留めてないと言っていていくらいのつぶれ方をしたんですけれど

も、骨一本折れなかったんです。見えるおかげだけでもすごく頂いたなあというふうに思うんですよ。

実は、目に見えないところでも、私はおかげを頂いたんだと思わせていただくんです。まず一番大きいものは、人との関わりですね。人の祈りであるとか人の働きということ。交通事故に遭われた方がおられるかもしれませんが、れども、2度3度と遭いたいものではございません。事故だけではなく、火災などでもそうですが、何か事が起これば必ず周りで人が動いてくださるものであります。一生懸命に、全く関係のないのにその場に居合わせたからと言って世話をしてくださる方。私の交通事故の時にも、交通整理をしてくださったり、ずっと声を掛け

てくださったり、お医者さんがいてくださったり、そういうお世話になった方々がたくさんおられます。知ってる人は一人もおりません。そういう中で私は運ばれたわけです。病院でもお医者さんや看護師さん、いろんな方々にお世話になっております。

そして、祈っていたというところもございます。私は、その当時鳥取教会にお参りさせていただいておりました。ですから、その鳥取の先生が交通事故に遭った時に本当に心配して下さって、ずっと毎日毎日ご祈念をしてくださっていました。私の母も、教会が病院から近かったので毎日お参りして、「こういう状況でございます」とお届けしてくれていました。

そのように皆が祈ってくださっていた。その

ことも事故がなければ考えることすらなかったわけです。この祈っていたというところに関しまして、極め付きと言いますか、都城で一つ起こっていました。それは、おばあちゃんの話です。

普段は離れて住んでいた父方の祖母ですけれども、その日はたまたま都城に泊まっていたのです。夕方、交通事故の電話がありまして、父も母も頭が真っ白になって、「どうしたらいいんだろう」とうろたえていたそうですが、そんな時にその祖母が、「どうぞこの度の事故が、この子にとって先のおかげになりますように」とお願いしてくれたそうです。

人の祈りというものがあって私自身が生かされてるんだなあ、今日を生きているんだな

あとということに気付かせていただいたのは、この交通事故の時なのです。

この事故では、相手の人にもけがはなかったとのこと。もちろん、交通事故など起こらないに越したことはありませんが、この事故をとおして榎原さんが得た気付きは、何ものにも代えがたい貴重なものでした。榎原さんはこの体験が元で、後に金光教の教師になり、人助けにいそしむ毎日を送っています。

私たちは、生きている間にいろんな災難に出遭うものですが、その時には、榎原さんのように、目に見えない大切なものをつかみ取って、また力強く立ち上がりたいものです。



## 《信心ライブ》

### 「闇と光」

おはようございます。

今日は、関西大学で宗教学を教えている  
高鍋北教会の宮本要太郎たかなべきたさんが、令和元年11月、  
金光教大阪センターでお話しされたものをお聞  
きいただきます。

今から約140年前、エジソンが白熱電球の実用  
化に成功しました。それ以来、人類は人工的な  
光を獲得し、大いなる恩恵を蒙こうむって生活して  
きました。しかし、宮本さんは、「人工的な光  
がまぶしすぎて、闇が見えにくくなっていて現  
代においては、その恩恵と同時に生み出された  
闇の部分にもっと目を向ける必要があるのでは

ないか」と訴え掛けます。

白熱電球の後に蛍光灯が発明され、さらに今  
はLEDというように、次々発明されています。  
そうすると、この地球上から自然の闇というも  
のがどんどん失われていく。人工衛星から地球  
を見ると、本当に夜の側でも明るいですね。  
特に、都会は煌々こうこうと明るい。

このように人類は、どんどんどんどん自然の  
闇を駆逐している。人工の光によって駆逐して  
いくという営みを続けてきた。まさにこれは近  
代文明の一つの特徴でもあるわけです。

ただ、ここで考え直したいのは、「人工的な  
光」が生み出されるといことは、「人工的な  
闇」も同時に生み出されているんじゃないかと

ということなんです。つまり、「生と死」や「善と悪」というものが、古来この「光と闇」によって例えられてきた。ということは、この「人工的な光」と「人工的な闇」というのは、実はそういう「善と悪」や「生と死」という二元論の対立をより強化するメタファーとしてあるのではないかと考えるんです。

「人工的な光」というのは、実は、生物としての人間にとっては、刺激が強すぎるようなんです。だから、「人工的な光」が強ければ強いほど、それは強い刺激となって私たちの体や精神に様々な悪影響を及ぼすということがよく分かっているんです。かつて、この「人工的な光」というものが生み出される前は、お日様が昇ってくる前に起きて、お日様が沈んだ後に眠りに

就くという生物学的なリズムが人間の体内時計というものを作っていたんですけども、「人工的な光」が生まれた時から、それを浴び続けることによって、どんどん崩れていくということが指摘されています。ですから、今は現代病として、不眠症や睡眠障害がすごく増えているんですが、これもやはり「人工的な光」を浴び続けたということに影響されています。それから、こういう明るい照明に普段から慣れていることで、対照的に薄暗い部分が見えにくくなる。これは、「この世の中の様々な闇の部分、負の部分、暗い部分、そういった部分を私たちがあえて見ようとしなさい。そちらに目を向けてもよく見えない」ということと無関係じゃないと思うんですね。

自然の光には、「かわたれどき（彼は誰時）」

とか「たそがれどき（誰そ彼時）」という言葉があるんですね。「かわたれどき」というのは、日が昇ってくる前の薄暗い時間帯です。遠くにいる人が、「彼は誰?」「あの人は誰だろうか?」というような時間帯が「かわたれどき」です。逆に、夕方日が沈んで、だんだんと暗くなって、「あれは誰だろうか?」というのが「たそがれどき」です。そういうように、ちょうど光と闇が入れ替わる中間的な時間帯というのがあった。それは、光と闇がいわば共存している、融合している時間帯ですよ。そういう時間帯というのは、何か人間は一日の疲れを落として、ほっとするような時間帯。あるいは、目が覚めて徐々に意識が覚醒していくような時間帯。そ

ういう切り替えの時間帯なんですね。

ところが、現代の人工的な光というのは、もうスイッチオンかオフで、パツとついてパツと消えますよね。これは自然にはないんですね、基本的には。自然にはいきなり明るくなったり暗くなったりすることはないんです。こういうふうに何でもオンとオフ、まさにコンピュータですね。ゼロかイチ。まさに二元論の極みですけども、ですから先程私が、「人工的な光が蔓延まんえんすることによって、善と悪や生と死というものの対立、二元論がより強調されたんじゃないか」と言ったのはその辺にもあるんです。単に光というものをオンかオフかで私たちは体験している。

まばゆいばかりの光。それは、科学技術の進歩と共に、経済の論理を優先させる社会、便利なものへと流されていく社会の姿です。その裏では、役に立たないと切り捨てられる人間、ものとして扱われる人間、社会の片隅でじっと息を潜める人間がいます。孤独に死を迎える人間、生命操作によって作り出される人間。その闇をじっと見つめ、人間のいのちとは何か、人間が生きてとはどういうことかを考える。

私は朝早く散歩することがあります。光が差し込み、だんだんと明るくなっていく一日の始まり。そんな時、この宮本さんの話を思い出し、闇に目を向けて、人間というものを思うのです。

《信心ライブ》

「私がポジティブになった訳」

おはようございます。

今日は、大阪府・金光教金岡教会かなおかにお参りしている横山夕夏よこやまゆかさんが、平成29年秋、大学2年生の時に教会でお話しされたものをお聞きいただけます。

事に帰ってきたことをとてもうれしそうに喜んで迎えてくれます。

そんな祖母は、毎朝4時に起きて、5時から始まる朝のご祈念に参拝しています。また、大阪にいる私たちによく電話を掛けてきて、台風や地震があった時はいつも心配して、電話で「何事もなかったか」と連絡してくれます。私が教会へ行ったことを電話で報告すると、「ありがとう」と、とても喜んでくれます。

私と金光教との出会いは、私の父方の祖母にあります。祖母は現在、父の故郷の愛媛県新居浜市にいへで過ごしていて、夏休みやお正月には家族で新居浜へ会いにいきます。毎回私たちが家族が帰ってくると、「よく帰ってきたね」と無

金岡教会には、小さい頃から父に連れられ、休みの日に参拝していました。教会は、「神様と一番近い距離にいられる場所」と思っていました。そして、教会に参拝し、願い事を教会の先生にお届けすることで、いつかきっとその願

いがかなうと思つて教会に参拝していました。

そう思っていた私が小学生の時、父方の祖父が重い病気になって入院してしまいました。私は教会に参拝した時、「おじいちゃんの病気が良くなりますように」とお祈りしていました。

しかし、その願いはかなわず、祖父は帰らぬ人となつてしまいました。その時私は、教会に行つてあれだけお願いしたのに、願いがかなわなかつたので、「教会に行つてお願いしても、何の意味もない。神様なんていないんだ」と思うようになつてしまいました。

それから大学に進学し、2年が経ちました。大学に入ってから、高校生の時よりたくさんの人たちと巡り会えました。その中で、私の「神

様」や「教会」に対する考え方が変わった出来

事が起きました。大学生活でのある日、友達から、「夕夏は嫌なことがあつても、ポジティブに捉えるよな」と言われました。私は、友達にそういうことを言われるまで、自分がそんなに物事をポジティブに捉えているなんて気付きませんでした。確かに私は、嫌なことがあると、最初は落ち込んだり腹を立てたりしますが、少し時間が経つと、「嫌なことだったけど、別の意味で考えると、結果的に良かったのかな」と思うことが多々あるように思いました。

そんな出来事があつた後、今年の秋に、私の祖母が交通事故で利き手の右手を骨折してしまいました。普通に考えると、骨折が良いことが

悪いことかといえ、悪いことだと思えます。

ところが、私が容体を心配して電話を掛け、

「手、大丈夫」と聞いたところ、私の祖母は、

「右手の骨折で、いつも当たり前にできていた

ことができなくなり、当たり前に使っていた右

手のありがたさが分かった。神様が、これまで

毎日健康に生きてこられたというありがたさを

伝えてくれた」と、骨折に対する不平や不満を

一切口にせず、右手の骨折に対して感謝の言葉

を口にするのです。

このように祖母は昔から悪いことが起きて

も、その悪いことに対して文句を言わず、感謝

の心を忘れずに、マイナスな考えからプラスの

考えに変えていたような気がします。

そして、祖母だけに限らず、父も母も悪いこ

とをプラスの考え方にすぐ変えてしまい、嫌だ

ったことをすぐに忘れてしまいます。そんな環

境の中で育ってきたので、私は嫌なことがあつ

ても、考え方をプラスに変えることは、私の中

でごく自然なことになっていると思います。

このようなことから、私の「教会」の印象は、

小さい頃の「神様をお願いをして、願い事をか

なえてもらう」ということから、いつからか、

「何事にも感謝をする心、ありがたさを感じる

ことができるように、何か手掛かりを与えてく

れる場所」なのではないかと思えるようになり

ました。

嫌なことがあつても考え方を変え、その中で

ありがたさを見付け出すことや、感謝の心を持

ことに気付きました。

つことで、少しでも幸せな気持ちになれるし、心穏やかになれたらいいなと思います。

金光教の教会では、神様のおかげに目覚め、お礼と喜びの生活を進めていく生き方を教えてくれます。

いつか祖母や父母のように、当たり前のことでも、その当たり前がたくさんの人や物に支えられているということを忘れず、何事にも感謝の気持ちを持って生きていける、そんな大人になりたいと思っています。

何事にも感謝する心を生み育て、周りの人々もポジティブになれる。そんなありがたい環境づくりの一員になりたいものですね。

いかがでしたか。

夕夏さんは、日々おばあさんや両親の祈りと、感謝を中心にした生活の中で育ちました。その中で、知らず知らずのうちに、友達からも認められるほど、ポジティブな生き方になっていた



《信心ライブ》

「ごちそうさまをどこで言う？」

おはようございます。

今日は、兵庫県にある金光教柏原教会かいばらの青木あおき洋ひろしさんが、平成31年2月に阪急塚口教会はんきゅうつかぐちでお話しされたものをお聞きいただきます。

胃がんのため、胃の大部分を取る手術を受け、ひと月ほど前に退院されたばかりの青木さん。どのような思いで日々を送っておられるのでしょうか。

今まで胃が体の中でどれほど重大な役割をしてきていたかということ、今本当に身に染みて分かりますね。

胃の5分の4が、さよならしてしまったこと

を「ごめんね」と思います。体から切り離して、捨ててしまったということが申し訳ないという思いを持ちながらね、「せめて焼肉でもしてやったらなあ。もつ鍋でもしてやったらよかったの：。」とか冗談で子どもらと話すんですけどね。

何年か経てば、食道とか小腸が、胃の働きを補ってくれるらしいですよ。でも、そんな簡単なものではないんです。一つは：年数経てばそうなるか知らんけれども：これは、もうそんな簡単に、「ああ、胃を取っても大丈夫でした」なんていう言葉は絶対使うたらいかなあ」と私は思っておりますね、今。しかし、何年かしたら、私も忘れてしまいかもしれません。

数年前に私は骨折しましたが、しばらくの間

変わっていきますね。

は、歩くことに、足のありがたさに、もう一歩  
一歩お礼を申し上げておりました。しかし、その私  
が今、足のありがたさをもう忘れているのを思  
うとね、胃のことも忘れてしまう時が来るのか  
もしれんと思います。そうはならんようにと思  
いながら過ごさせていたいております。

一つには、食べ方。一個一個よく噛んで食べ  
ないとあかんですよね。今まで私は、どんな  
食べ方していたかという反省をさせられる。の  
ど越しを楽しんだ食べ方でしたね。

基本的には何を食べても大丈夫なんですよ。  
何でも結構です。でも、少量しか受け付けない  
んですよね。今はそういう体になっております  
けれども、でも、その食べ物に対する食べ方が

ご飯粒を一粒食べるのに、どれほどかむかと

いうぐらいにかみます。今までのど越しで飲み  
込んでいて、ほとんどかんでないのが、自分で  
よく分かりました。最初に出たのが重湯。それ  
からだんだんと五分がゆとか濃くなっていくな  
ですけども、そのおかゆ一つね、少量ずつ飲み  
込んでいかなあかんで、おかゆをかむわけで  
すよ。今までどれだけかんでいなかったかとい  
うのは、おかゆが出てようやく分かるんですよ  
ね。もうすぐ口に入れたらのみ込もうとしてし  
まうんです。胃が無いもんですから、胃の代わ  
りを口でせなあかんわけですから、かんでかん  
でということをせなあかんですね。かんでか  
んでのみ込む。ドロドロにしてから、胃の働き

を口でしてからのみ込むということをしており  
ましたので、だんだん食欲がなくなっていく。  
もう疲れるんです。「もう…。またかまなあか  
んのか…」というぐらいにね。それでお腹も空き  
ませんしね。

でも、その時に今までの食べ方の反省をだ  
ぶさせてもらいました。どんなに胃に負担を掛  
けてきたかと思いましたが、相済まん思いがし  
まして、病院の食事を頂きながら、おわびを申  
しながら、しっかりとかんで…。そうしました  
時に、おかゆですけれども、もう粒はないけれ  
ども、頂き方が変わりましたら…時間を掛けて  
口の中をかみますと、一生懸命かむ間にね、私  
は、「やはりこれは信心でかましてもらわな  
あかん」と思った時に、稲穂を思い浮かべるよう

になったんですね。

お米をかみながら、稲穂を思い浮かべる。二  
ンジンを食べながら、畑を思い浮かべる。そし  
て、そこに、大地の中から芽が出て、育ってい  
った姿をもって、今日ここに頂いておるこのお  
野菜をかみしめさせていただいておる。それ  
は天と地の働きがあり、そして、その働きの中  
でお育てくださった神様のお働き、そして、お  
百姓さんのお働き。もう天地と人間のコラボレ  
ーションの作品というかね…。そういうものと  
して思い描いて、そして、「それを今頂いてお  
ります」とお礼を申しながら食べるようにさせ  
てもらったんですね。

一つひとつを、今もかみしめながら食べない  
といかんで…。これもゴクンと飲むようにな

ってきたら、また消えていくかもしれませんけど…今大事にさせてもらってましてね。

ですから、鶏肉が出てきた時には、鶏を描く。

描きにくいですよ。でも、鶏を描いて、「ああ、鶏のいのちを頂いて…」と思う。卵を食べましても、また鶏が出てくる。鶏を描く。

そして、鶏も鶏だけが生きているわけじゃないですから、鶏が生きていくためには、また鶏の餌もあってのことです。「天地の働きの中で育ったものが、今日ここにあって、いのちを頂いているんだ。私のいのちとつながっている」というような思いを持ちながら食べないと、何か申し訳ないようになってきましたね。今、それに取り組んでおる最中でありまして。

そういう中で、いろいろとおわびを申しなが

ら、お礼を申しながら生活させてもらっていたら、とても充実してます。今までとは全然違う充実感ですね。食事に対する充実感。今までどんな食べ方していたかなと思います。一食食べるのに、もう5分も掛けずに食べてましたね。すぐ「ごちそうさまでした」と終わっていました。

今は違いますよ。最近では、ごちそうさまをおトイレで言います。

ごちそうさまをおトイレで言うという青木さん。口、食道、胃、腸を始め、全身の働きがあって、食べ物栄養は身に付き、不要なものは排泄される。それが、いのちの元になっているということ、身に染みて感じておられるので

しよう。

ユーモラスなお話から、「食べることを通して、「今生きていること」への深い喜びが、生き生きと伝わってきました。

今、こうして生きているということ。そこには、いのちを支える天地の働きがあることを、毎日の食事の度ごとに、ありがたく味わってきたいものですね。



**金光教本部 ラジオ放送係**

**住所** 〒719-0111  
岡山県浅口市金光町大谷320

**電話** 0865-42-6453

**FAX** 0865-42-2114

**メール** [w-master@konkokyo.or.jp](mailto:w-master@konkokyo.or.jp)

# KONKOKYO

朝日放送 日曜日 あさ5時40分

放送センターHP  
「こころで聴く  
おはなし」



「こころで  
聴くおはなし  
Podcast」



放送後の音声はWebサイトやPodcastで聴くことができます。